様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年　6 月 15 日現在

機関番号：34435
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008 ～ 2010
課題番号：20730462
研究課題名（和文）　PDD 女児グループプログラムの立案と応用行動分析的検証

研究課題名（英文）Development and Validation of the Effectiveness of Group Intervention Protocol using Applied Behavior Analysis in female children with PDD。

研究代表者　佐田久　真貴（SADAHISA MAKI）
大阪人間科学大学・人間科学部・准教授
研究者番号：10441479

研究成果の概要（和文）：本研究は、広汎性発達障害（PDD）女児・女子を対象としたグループプログラムを立案し、臨床実践を通した行動分析的検証を行うことが主たる目的である。参加者は、自身の障害や困り感について学び、対処法や工夫をスタッフ・保護者と協働で実践した。その結果、困り感や不適応行動は軽減し、適応的な行動レパートリーが拡大する効果を得た。また、仲間との出会いや女性スタッフとの活動は、障害特性を含めた自己理解への促進、女性としての知識・スキルを拡大させる機会となった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop group intervention program for female children with Pervasive Developmental Disorders (PDD) and to examine its effectiveness using applied behavior analysis in a clinical practice setting. The participants first learned about their disorder and issue of "uneasiness" and then with the help of staff and their guardians they put the coping strategies into practice and find personalized ways that work for them. As a result, this study reduced the feeling of uneasiness and maladjusted behavior as well as broadened their repertoire of adaptive behaviors. Also, the opportunity to meet others with the same challenge and undergo activities with female staff promoted self-awareness including characteristics of the disorder and improved female-oriented knowledge and skills.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
20 年度	600,000	180,000	780,000
21 年度	400,000	120,000	520,000
22 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：PDD 女児・グループ支援・応用行動分析・ケースフォーミュレーション・ストラテジーマップ・仲間

1．研究開始当初の背景

広汎性発達障害（以下、PDD と記す）の疫学的調査によると、その発生性比は 1,33 から 16,0 と幅があるが圧倒的に女児の発生率が少ないという見解が支持されている（Fombonne　E、2003）。女児・女子例の少なさゆえ、女子例への支援についての報告は男子事例に比べ少ない。昨今の研究報告では、

児童期・青年期の PDD 児・者に対し、行動分析・応用行動分析的アプローチを用いたグループ支援の有効性が唱えられ（井澤・井上ら、2007）、自治体や民間団体主催のグループやデイ・ケアもあるが、女子の参加者が少ないことが報告されている（杉山、2005）。一方、PDD 女児を持つ保護者との個別相談場面では、障害特性に関する質問や悩みに加えて、女性特有の問題（性や身だしなみについて等）に関する相談が増える。また、ある程度の子育てを経た保護者の体験談や実際を聞きたいという要望も多い。これらの傾向は、PDD 女児・女子が女性としての発達段階に応じた心理教育やアプローチを受けることの必要性と、保護者支援の一環として展開されるべき支援であることが示唆される。

一方、応用行動分析のストラテジー（strategy; 戦略）は、教育・医療・福祉・看護・リハビリテーションなど、多くのヒューマンサービスの領域で用いられ、大きな臨床上の実績をあげている（山本、2005）。このストラテジー（戦略）は、個人に起きている問題を「個人と環境との相互作用」からとらえ、「順序だった攻略」手続きを明確に立案できる「ストラテジー・マップ」の作成から始まる。そして、「タクティクス（tactics; 戦術）」というテクニックを用いてアプローチするという技法だといえる（武藤、2007）。しかし、タクティクスを有効活用するための必要なストラテジーが、未だ明確とは言えず、理論としての弱さが指摘されている。近年、ある問題に対する解決には、さまざまな視野から介入していく包括的支援の有用性が唱えられていること、特別支援教育が始まっていること、生態学的アプローチの観点、等をふまえ「ストラテジー」と「タクティクス」の関係性を明確にしていく指向性は、社会的にも非常に意義があると考えられる。

2．研究の目的

過去の研究では、攻撃性やひっこみ思案を示す女児への調査やアプローチに関する報告はいくつか見られるが（佐藤、2002、佐藤・佐藤、1998）、上述したように PDD 女児・女子のみのグループ支援に注目し、実践した研究は非常に少ない。神谷（2007）は、女子同士でスキルを獲得する機会を積極的に提供する必要性を論じている。

そこで、PDD 女児・女子グループを立ち上げ、発達段階や成長に応じた女児・女子特有の問題を、個人の「心の中の働き」であるとは考えずに、「個人と環境との相互作用」からとらえ、彼女たちに必要な行動レパートリーを増やしていくアプローチを実施することとした。PDD 女児・女子グループでは、女性としてのスキルや知識の獲得を促す機会と保護者への情報を提供する。さらには応用行動分析的立場から、支援の「ストラテジー」と「タクティクス」の関係を検討することを目的とする。

3．研究の方法

（1）グループの概要

グループの名前を「あでりーくらぶ」とし、2～3 名の少人数制とした。対象は小学校高学年から高校生で、医療機関等において広汎性発達障害（PDD）、自閉症・高機能自閉症・AD/HD 等の診断を受けていること、あるいは、そのための経過観察中であることを条件として募集した。実施頻度は、参加者の状況に応じて変更できる体制としたが、基本的には毎週火曜日午前 11 時から午後 12 時半までをグループ活動日時として設定した。開催場所は K 大学臨床心理相談研究所内の 1 室であった。ここは、キッチンやユニットバス、畳の部屋などが設置されており、冷蔵庫や電子レンジ、ポット、テレビ等、一般の家庭に通常あるものが用意されている。ADL の確立や SST などの様々な訓練やセラピールームとして利用されている構造になっている。

参加女児・女子たちが活動中、保護者が情報を交換したり話し合えたりするグループワークを併行で実施した。

（2）グループ参加者とスタッフ

グループ参加者は、アスペルガ－障害の診断を受けている女児 12 歳（以下、A 子とする）と PDD の診断を受けている女児 15 歳（以下、B 子とする）で、両者共に知的能力は平均～平均以上であった。また、グループ活動を運営するメインスタッフ（報告者、以下 Th とする）と臨床心理学科に在籍する女子学生 2 名が毎回参加し、母親グループは、臨床心理学研究科に在籍する大学院生 2 名が担当した。スタッフトレーニングと活動ごとのスーパーヴァイズを行い、親子の言動や状況、次回の目標等を全スタッフが共有した。

（3）グループ活動の内容と方法

グループ参加までに個別活動を実施し、アセスメントと目標設定、そして応用行動分析（ABA）的介入を行った。それぞれの回数と活動内容は個々の状態に応じて設定した。おおまかなプログラムは毎回ほぼ同じ流れとし、次回の内容を予告するようにした。Th と本人・母親の 3 者面接を毎回の活動前後に実施した。活動前の面接では、参加者の当日の状態をアセスメントすること、母子から伝えたいことや質問を聴取し、対応することを目的とした。活動後の面接では、活動内容と参加者の様子について母親に伝達すること、呈示したホームワークに母親の協力を得るための説明、次回の日程確認等を目的とした。

表 活動の流れ

10:45～	親子面接	アセスメント
11:00～	受付	名札をつけて準備
	気分シート	1週間の気分を振り返る(短縮版POMS)
11:10～	あそび・学びの時間	障害特性や困り感に焦点をあてた内容で個別対応が中心
11:40～	あそび・エクササイズ	女性としての知識とスキルに焦点をあて、さらに女の子同士で"おしゃべり"を楽しむ場面になることを工夫した
12:10～	茶話会	母親も参加し、ほぼ自由な構造とした
12:25～	アンケート	振り返りを行い、次回の活動内容を予告
解散後	保護者への伝達	

（4）評価

アセスメントによる個々の目標に応じたABA的介入の評価は、参加者の言語行動と行動、アンケート記述、母親からの報告等の変化をみた。また、毎回の活動後に実施した5段階アンケートと、グループ活動修了時に実施した10段階アンケートでグループ評価の回答を求めた。参加者の相互作用の変化や影響については、直接的な言動のやりとりの有無や変化、そして個々の言語行動（感想）から評価した。

4．研究成果

（1）グループ支援の効果

①グループ満足度調査：毎回の活動終了後に実施した5段階評定のアンケートでは、両者共に高得点を得た。

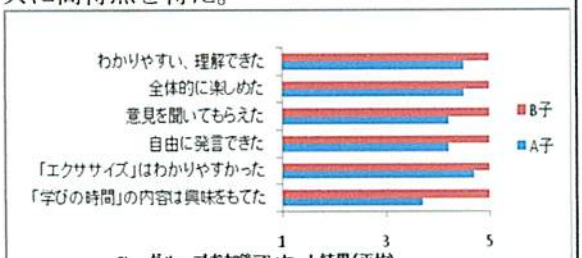

Fig グループ参加後アンケート結果(平均)

②グループ終了時の満足度調査：「グループの質」「満足しているか」「援助が必要になったとき、このグループに戻りたいか」の項目が10段階評価で平均9点と高評価だった。一方、「十分に時間をかけた援助だった」「知人に推薦する」の項目では、平均7、5点となり、全体の結果と比較するとやや低かった。今後のグループ運営を検討する際には重要な結果となった。

③行動観察・言語行動の検討：感覚過敏や日常生活のエピソードの話題をとりあげた場面では、A子とB子のやりとりが増加した。ペアになった相手がパニックになったり不安定になったりする姿を見て、自身の過去を振り返り、自己理解がさらに深まっていく様子が伺えた。また、学生スタッフの服装に関心を示したり、学生のこれまでの進路選択や就職や恋愛についての質問をしたりすることも観察された。両者にとって学生スタッフは、いわゆる女性としてのモデルとして機能していたことが伺える。

（2）症例

個々の困り感や問題へは、ABAをベースにした介入を行った結果、それぞれに問題の改善やスキル獲得・活動範囲の拡大等の効果を得ることができた。以下、それぞれの介入とその経過を示す。

①A子への「感情を見つけにいこうプログラム」：自分の怒りやイライラした気持ちを抑制することに困難を感じていたA子は、自らの暴言や暴力（物を投げる、ける等）に悩んでいた。そこで、「学びの時間」を用いて感情について学ぶプログラムを導入した。自分の"うれしい""楽しい"等のポジティブな感情をゲームを使って考えるセッションから開始した。その後、"怒り""悲しい"等のネガティブな感情をゲームやソーシャルストーリーを用いて考えるセッションへと進んだ。このプログラム開始時と、半年経過時、終了時に「感情についての質問」を6段階評定で実施した結果、周囲への怒り感情に変化が認められた。特に変化のあった項目は、「他の人が自分を怒らせる」「自分のかんしゃくを抑えられない」「人が思い通りにならないと腹が立つ」等で、他者への怒りや自分の怒り感情の自己理解に変化が認められた。

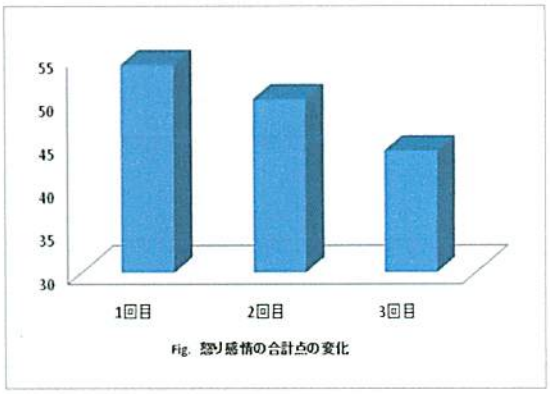

Fig. 怒り感情の合計点の変化

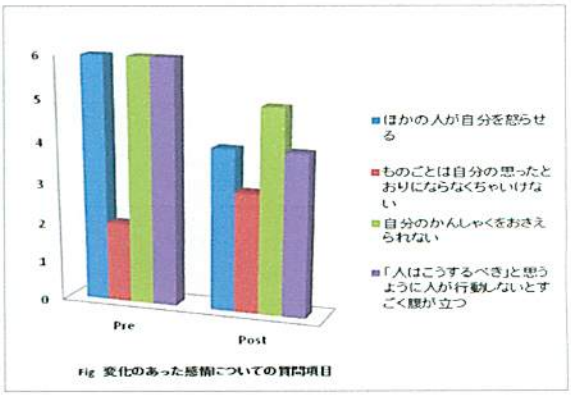

Fig 変化のあった感情についての質問項目

②B 子へのセルフ・モニタリングを用いた食行動改善プログラム：

◆*第1期（＃1～＃4）：個別指導*

障害の特性を改めて学び、日常の困り感にはABA の考え方を活用することを知る機会となった。セルフ・モニタリングは非常に効果があり、手伝い行動の増加と問題行動の軽減の効果をもたらせた。

◆*第2期（＃5～＃7）：グループ活動*

自らの経験がフィードバックされ、言語表出することが増え、自己理解の促進につながった。また、日常生活の中でクールダウン方法等、対処スキルを上手に活用できるようになった。POMS 短縮版をグループ時に毎回実施していたが、その結果を以下に示す。不安や抑うつ等のネガティブ得点は軽減し、活気の得点はやや増加した。これらの結果からも、B 子の困り感や問題が軽減され、生活しやすくなっていることが伺える。

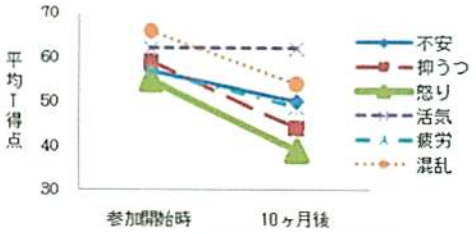

Fig. 介入前後のPOMSスコアの変化

◆*第 3 期（＃8～）：日常での行動範囲が拡大し、食生活改善を目標とした時期*

セルフ・モニタリングとダイエット行動の心理教育、学生スタッフとのかかわり等の効果により、B 子の適切な食行動改善につながった。その結果、体重と BMI の変化にもつながり、B 子の行動レポートリーはさらに拡大することとなった。

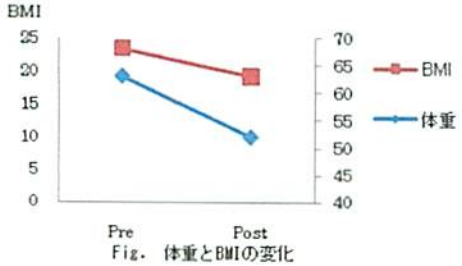

Fig. 体重とBMIの変化

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

佐田久真貴、PDD 女児グループプログラムの立案とその実践報告　吉備国際大学研究紀要、査読無、第 20 号、2010、67－75.

〔学会発表〕（計 3 件）

佐田久真貴、PDD 女児グループプログラムの実践報告　日本小児精神神経学会第 104 回大会発表論文集、2010、pp. 43.

佐田久真貴、広汎性発達障害のある女児グループの実践　日本行動療法学会第 36 回大会発表論文集、2010、250 - 251.

杉原聡子、松原未歌、佐田久真貴、PDD 女児を持つ母親に対するグループ支援の試み　日本行動療法学会第 36 回大会論文集、2010、pp. 220 - 221.

6．研究組織

(1)研究代表者

佐田久　真貴（SADAHISA MAKI）

大阪人間科学大学・人間科学部・准教授

研究者番号：10441479

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし